

## 組合員、そしてニーズの多様化への対応を模索して日々気配り

「組合員さんの業種もニーズも多様化する中で、私たち事務局は何を求められているのかを把握するには、事務局を訪れる社長や従業員の皆さんとの会話から小さいタネを拾い、それを温め、どこかで花開かせたい。その思いで日々の仕事に取り組んでいます」と日頃からの姿勢を語るのは、協同組合秋田卸センター次長の堀川深雪さんである。

### 多様化する組合

秋田市内で広い駐車場や倉庫を求める卸業者が団地制度を活用して合理化・近代化を図ろうと誕生したのが当組合である。昭和45年の設立時には38社だった組合員は、現在では56社を数える。その構成は多様化が進み、現在は卸・小売業、サービス業などが集まる総合流通団地の性格が強くなっている。

このような変化に伴って組合事業も多様化を進めてきている。会館や駐車場など組合施設の管理という基本事業も行いながら、組合員の求める組合機能は何か、ここを常に模索していると堀川さんは言う。

現在、重点的に取り組んでいるのは防災関連事業である。平成22年に組合設立40周年記念の一環として、秋田市と「災害時における応急生活物資の供給等に関

する協定」を締結したことで、異業種団地の強みが生かせることを組合員間の共通認識として持つようになった。さらに、昨年の東日本大震災を受けて、団地機能向上支援事業の一環として、防災ハンドブックを配布したほか、建物の耐震診断を希望する組合員を対象に実施、その結果報告を2月半ばに行い、さらに組合員に防災意識を高めてもらえたらと期待している。

「団地だから一箇所に集まっており、ふだんから互いの顔が見えている」という機能を活かし、防災意識の向上と互いに助け合えるような組織体制とともに「安全・安心な卸団地づくり」を目指しているという。

### きめ細やかな対応がモットーの事務局

このような組合業務の運営に当たる事務局は総勢7名、常務理事一人を除き全員女性である。組合では簡易郵便局として郵便・貯金業務等を行っているほか売店もあり、事務局を訪れる組合員、従業員も多い。また、月1回開催する理事会のほか社長会や懇親会など数多くの顔を合わせる機会を活用しながら話し合う場作り・きっかけ作りの工夫も心かけている。「女性職員が多い分、話しやすい雰囲気」が事務局にあるのかな」と堀川さん

は思っている。

その堀川さんの仕事はとにかく幅広い。理事会の準備、組合行事の企画・実施などで「1カ月はあつという間」の日々にあつて、自身も他の職員たちも少しでも組合業務・運営の改善につながるようにと「組合員の要望をよく聞いて、自分の仕事で足りているかを考え、下地作りをする」という気配りの姿勢を常に求めている。そこで「日々の業務の中でも知識の拡充など自分のスキルアップを促している」とのこと、堀川さんを含め3人の中小企業組合士が活躍中である。

### 先輩組合士と今

当組合の組合士は堀川さんが第1号。受験のきっかけは上司の薦めだったが、子育て真っただ中の当時、ご主人の理解と協力も得ながら、「マイペースで」と自分に言い聞かせながらのトライだったそう。しかし、この挑戦を通じて、「自分の仕事を単体としてだけでなく、全体から見るとどうなるのか、そこでは何がポイントになるのかなど、総合的な視点から捉えて仕事をしようになった」と自らの変化を実感したと言う。

こうしたパイオニアの時宜を得たサポートや業務対応が納得につながり、組合では、資格手当を設けるほど組合士への



理解と評価は高くなっている。「資格を取れば仕事も理解できるし応用も利く。そうすれば自分がこれまで以上に動きやすくなるから」と、堀川さんは自らの経験も踏まえて、子育て世代の女性職員に「無理はせずチャレンジ」できるとような意識付けも行っている。

### これからの組合、組合機能とは

入職して30年余。組合員の新規加入や世代交代が進む中、組合の歴史を踏まえたアドバイスを求められる場面も多い。こういう伝統や経緯を後進にも伝えたいと堀川さんは思っている。

目下の最大の課題は「多様化にどう対応し、サービスを提供するか」で、従来とはやや異なる方向であっても組合員の要望が高ければ検討してみたいと言う。「でも、無理は禁物。今ある事業を下敷きにしながら、どう展開するかを基本」とのこと、平成16年から実施している協同組合秋田古紙回収協会との連携による古紙回収に取り組んだように、例えば「リサイクル」の視点で他にも展開できないかなど、「複合流通団地としての機能をどう高めるか、アイデアを温めつつ、具体化に向け模索する日々」だとのことである。